

埋蔵文化財緊急調査事業に係る
埋蔵文化財調査報告

平成12・13年度増山城跡総合調査概報

増山城跡 IV・V

2002年3月

砺波市教育委員会

序 文

増山城の歴史は、南北朝時代から近世の初めに至る約250年に及び、砺波地方の歴史と深く関わりを持っています。特に戦国時代に入ると、神保勢と越後長尾・上杉勢、上杉勢と織田勢、佐々勢と前田勢など、越中領主を目指す様々な勢力が攻め合う最前線となっていました。

増山城跡は県内有数の規模を誇る山城として知られており、「越中三大山城」の一つに数えられています。城跡は昭和40年に富山県指定史跡に、周辺の土塁は昭和56年に砺波市指定史跡に指定されています。

この増山城跡に本格的な調査の手が入ったのは、昭和60年代前半に砺波郷土資料館が実施した増山城跡調査事業です。この調査により、二重に巡る空堀をはじめ、橹台や郭跡など、従来考えられた以上の大規模な掘張りであることなどが判明しました。

このときの調査は踏査を中心に実施しており、埋蔵文化財に関する調査が実施しえなかった点などに課題が残っていました。そのため、史跡構造の解明を目的とした増山城跡総合調査事業を、国や富山県の補助を受け、平成9年度から7カ年計画で実施することとしました。4カ年目・5カ年目となる平成12年度・平成13年度については、いわゆる大手口と推定されている増山ダムルートの防護施設や通称「安寧屋敷」と「三の丸」間の大規模な堀の構造解明のための試掘調査を実施し、その概要を概報として作成しました。

この小冊子は、まだまだ内容としては不十分ですが、発掘調査によって得られた数少ない資料を紹介し、文化財を通じて先人の文化を理解・伝承するとともに、地域の歴史と文化の活用にいくばくかのお役に立てば幸いです。

おわりに、調査の実施に多大なご協力をいただきました増山城跡総合調査委員会や地元増山地区、富山県埋蔵文化財センターなど、関係のみなさまに厚くお礼申しあげます。

平成14年3月

砺波市教育委員会 教育長 飯田 敏雄

例　　言

- 1 本書は、富山県砺波市増山地内に所在する増山城跡の埋蔵文化財調査概要である。
- 2 事業は、緊急発掘調査事業によって実施した。
- 3 調査期間・面積は次のとおり。

発掘調査期間	平成12年度	平成12年7月17日～平成12年12月1日
	平成13年度	平成13年8月1日～平成13年11月26日
発掘面積	279m ² (平成12年度)	44m ² (平成13年度)
測量調査対象面積	91,000m ² (平成12年度)	82,000m ² (平成13年度)
- 4 調査体制は以下のとおり。

増山城跡総合調査委員会	国際日本文化研究センター	教授 宇野隆夫 (平成13年3月31日まで)
	日本考古学協会会員	西井龍儀
	富山県埋蔵文化財センター	所長 岸本雅敏
	富山県教育委員会文化課	課長 林 清文 (平成13年3月31日まで)
	富山県教育委員会文化財課	課長 伊藤清江 (平成13年4月1日から)
	富山大学人文学部	教授 前川 要
	郷土史家	佐伯安一
	城郭研究家	高岡 徹
	砺波市文化財保護審議会	委員 堀田多聞 (平成13年4月1日から)
	砺波市文化財保護審議会	委員 砂田龍次 (平成13年4月1日から)
	梅樓野地区増山自治振興会	土田昌春
	砺波市教育委員会	教育長 飯田敏雄
	砺波郷土資料館	館長 新藤正夫 (平成13年3月31日まで)
調査担当者	砺波市教育委員会	生涯学習課 学芸員 利波匡裕
調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長 井上辰夫 (平成13年3月31日まで)
	同	教育次長 喜田豊明 (平成13年4月1日から)
	同	生涯学習課 課長 松本邦雄
	同	生涯学習課 係長 小西清之 (平成13年3月31日まで)
	同	生涯学習課 係長 竹林秀明 (平成13年4月1日から)
	砺波郷土資料館	館長 新藤正夫 (平成13年4月1日から)

なお、現地の清掃・作業員については、増山地区自治会(若森進区長(平成12年度)・田中広義区長(平成13年度)・増山城跡整備委員会(宮野秀一委員長)、砺波市シルバー人材センターより協力を得た。測量調査についてはJR上智に委託した。

- 5 資料の整理については、利波、高木美奈子、阿部来、向島裕が行った。本書の編集と執筆は、西井龍儀、高岡徹の指導を受け、利波が行った。
- 6 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
 - 尾田武雄、久々忠義、塩田朋弘、神保孝造、松澤奈那子、宮田進一、宮野秀一、若森進
- 7 調査において次の地権者の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
 - 高島昭、土田一夫、土田昌春、西村二三男、信田豊次、若森進(以上平成12年度)
 - 石田孝之、石倉鉄男、安カ川正治(以上平成13年度)
- 8 本書の押図の表示については、方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 9 本文中の郭などの表記については『増山城跡調査報告書』[砺波市教育委員会・砺波郷土資料館1991]に準据する。
- 10 出土品および記録資料は砺波市教育委員会で保管している。
- 11 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。
 - 高木美奈子(砺波市教育委員会)、天野秋一、荒木久平、石田孝之、島田一郎、高島昭、高島一子、西村昌哉、信田正明、安カ川礼子(以上砺波市シルバー人材センター)、阿部来、向島裕(以上富山大学考古学研究室)(以上平成12年度)
 - 高木美奈子(砺波市教育委員会)、天野秋一、荒木久平、石田孝之、島田一郎、高島昭、高島一子、西村昌哉、信田正明、安カ川礼子(以上砺波市シルバー人材センター)(以上平成13年度)

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 造跡の立地と歴史的環境	1
II 調査に至る経緯	1
III 調査の経過と方法	4
1. 調査の経過	4
2. 座標軸の設定	4
IV 調査の概要	5
1. 平成12年度調査区	5
(1) 概 况	5
(2) 造 構	5
(3) 造 物	7
2. 平成13年度調査区	18
(1) 概 况	18
(2) 造 構	18
(3) 造 物	19
V ま と め	21
1. 平成12年度調査区	21
2. 平成13年度調査区	21
引用・参考文献	22
写真図版	23

図 表

第1図 周辺の遺跡分布図	第9図 出土遺物3
第2図 調査範囲図	第10図 E・F郭エレベーション図
第3図 平成12年度調査区位置図	第11図 平成13年度調査区位置図
第4図 E郭平面・断面図 (T2, T3)	第12図 調査区平面・断面図 (T1, T2)
第5図 F郭平面・断面図 (T4, T7~9)	第13図 エレベーション図
第6図 F郭下平面・断面図 (T1, T5, T6, T10)	第14図 出土遺物4
第7図 出土遺物1	
第8図 出土遺物2	
第1表 周辺の遺跡一覧	

I 遺跡の立地と歴史的環境

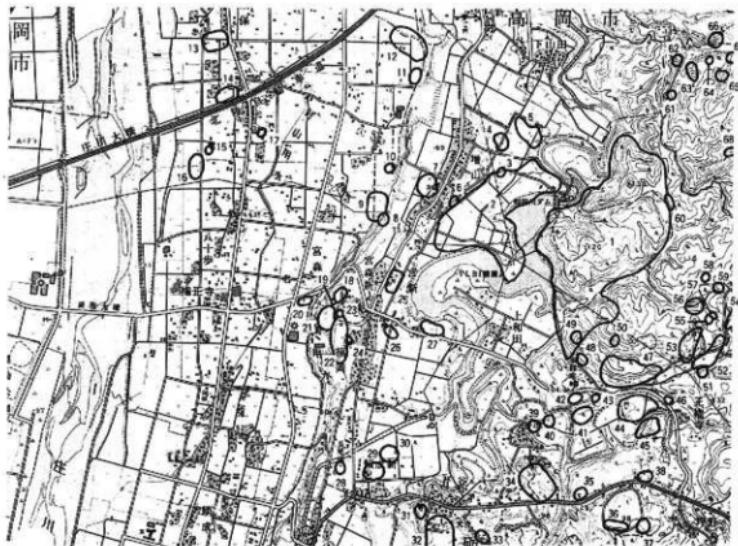
増山城跡は砺波市の東部、婦中町との境に近い庄東山地の丘陵上に位置する。芹谷野段丘と庄東山地の間に和田川が複雑に蛇行し、地質基盤である青井谷泥岩層を抉り込み、深い谷を形成している。その谷をせき止めて和田川ダムが築かれ、ダム東側の急崖の上に増山城跡が立地している。ダム湖水面下および増山城跡と西側に対峙する丘陵上には、文献資料や試掘調査から城下町の存在が知られている。城下町が確認された増山遺跡は、圃場整備事業の関係から試掘調査が昭和52年に行われており、縄文・古代の遺物、中世末～近世初頭の遺物・遺構が検出された。城跡周辺には旧石器時代から近世に至るまで多くの遺跡の存在が知られているが、旧石器時代の遺跡では芹谷遺跡が代表的で、ナイフ型石器や槍先型尖頭器などが出土している。嚴照寺遺跡は縄文時代中期の遺跡であり、昭和51年の発掘調査では11棟の竪穴住居跡と多くの縄文土器や石器類が出土している。当遺跡から出土した土器は、嚴照寺I～III式に分類され、縄文時代中期前半の標式土器となっている。増山城跡近隣には、増山团子地窯跡をはじめ増山外貝喰山窯跡、小丸山1・2号窯跡、増山赤坂窯跡、増山磐山窯跡、正權寺後島窯跡など、8世紀後半から10世紀代半ばまでの須恵器窯跡・炭焼窯跡が多数確認されている。これらの窯跡群は芹谷野段丘沿いに比定されている東大寺領莊園の井山、伊加流伎、石栗の各荘との関連が考えられる。芹谷野丘陵上には能景塚・為景塚と呼ばれている塚が存在し、能景塚は永正3年(1506)に増山城を攻めた長尾能景が般若野で敗死したことにより造ったとされる。長尾為景は永正12年(1515)以降幾たびも越中へ進攻しており、没年は天文11年(1541)という説が有力視されていることから、為景を記っている塚としての断定はできない〔河合1965〕。

II 調査に至る経緯

増山城跡の本格的な調査については、高岡徹氏、西井龍儀氏を中心として砺波郷土資料館が昭和62年から約3年間にわたって実施されている。この調査では、城郭・文献・考古の三分野の研究者による調査グループが結成され、作業が進められた。調査の結果、増山城の縄張りが初年度にはほぼ判明し、二重の空堀や櫓台、長大な堅堀、郭跡など数々の遺構が確認された。その成果をふまえて、昭和63年11月には増山城跡を中心として「北陸地方中世城館セミナー」が開催されている。

これまでの調査では、増山城跡の地形観察が行われていたが、より明確に増山城跡の実態を把握するため考古学的な調査が必要であることが望まれていた。これを受け、砺波市では平成9年度に増山城跡総合調査委員会を設立し、増山城跡の実態を解明するとともに、重要な文化遺産を周知・活用する方法を検討することとなった。砺波市教育委員会は、当初、平成9年度から4ヵ年で増山城跡を調査する計画とし、3ヵ年にわたり調査を実施したが、広範囲な増山城跡を4ヵ年の調査で発掘・測量調査し、その全容を明らかにすることが難しいと判断されたため、富山県教育委員会文化課(現文化財課)と協議の結果、調査期間を7ヵ年とし、平成15年度まで3ヵ年延長することとなった。

これまでの調査についてであるが、平成9・10年度は城跡南部を中心として発掘調査を実施した。その結果、平成9年度では無常東下郭を中心とした範囲において、複数回にわたる大規模な造成工事が実施され



第1図 周辺の遺跡分布図

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	増山城跡	山城	中世	35	須成A遺跡	散布地	満文
2	増山遺跡	散布地・集落	満・古・中・近	36	須成C遺跡	散布地	満文
3	増山魚田遺跡	墓葬	奈良	37	須成D遺跡	散布地	旧石器?
4	高沢島田遺跡	散布地・集落	古代?	38	須成B遺跡	散布地	満・平・中
5	高沢島I・II遺跡	散布地・集落	旧・滿・古・近	39	須成	塚	中世?
6	増山妙覚寺抜掘跡	墓葬	奈良	40	須成遺跡	散布地	縄文
7	増山西遺跡	散布地	古代?	41	須佐東村山遺跡	散布地	古代
8	宮保城跡	墓葬	奈良	42	須佐東村A遺跡	散布地	旧・承・古
9	宮保南寺	寺院	難倉・東町	43	須原向島遺跡	散布地	古代
10	行者寺	墓葬	中世?	44	正種寺遺跡	散布地	平安
11	東保石坂南遺跡	散布地	古代	45	正種寺南遺跡	散布地	平安
12	東保石坂北遺跡	散布地	満・古・鐵	46	正種寺前山遺跡	散布地	中世?
13	須佐土居跡	墓葬	中世	47	金ヶソ山遺跡	散布地	古代
14	須佐高泡瀬遺跡	散布地	平安・難倉	48	金ヶソ山遺跡	散布地	古代
15	東保松岩堂遺跡	寺院	中世	49	増山園子地遺跡	墓葬	奈良
16	高坪遺跡	散布地	平・継・盛	50	増山赤坂遺跡	墓葬	平安
17	東保高池南遺跡	散布地	古代?	51	正種寺後鳥羽跡	墓葬	平安
18	宮森新北島I遺跡	集落	縄文	52	正種寺後鳥羽遺跡	散布地・集落	平安
19	光明其曾塚	墓塚?	中世?	53	増山十村山遺跡	散布地・集落	満文・古代
20	宮森遺跡	散布地	縄文	54	小丸山遺跡群	墓葬	平安
21	大谷島遺跡	散布地	鐵・平	55	增山外貝塚山遺跡	墓葬	奈良・平安
22	野原寺遺跡	墓葬	縄文	56	増山燒山遺跡	散布地	古代
23	宮森新所經冢	墓塚	中世?	57	增山外貝塚山遺跡	散布地	旧石器
24	野原寺境内遺跡	墓?	縄文	58	増山荒山窯跡	窑・製陶	平安
25	宮森新所遺跡	散布地	奈良	59	増山外法源山窯跡	窑	平安
26	宮森新天池遺跡	散布地	縄文	60	增山赤坂山遺跡	散布地	古代?
27	上和田遺跡	散布地	縄文	61	西谷No.9遺跡	房塚?	古代?
28	高尾馬穴塚	墓塚	中世?	62	西谷No.7遺跡	房塚?	古代?
29	安足能京塚	墓塚	中世?	63	西谷No.8遺跡	房塚?	古代?
30	朝成新所遺跡	散布地	縄文	64	西谷No.5遺跡	房塚?	古代?
31	岸谷下大門遺跡	散布地	中世・近世	65	西谷No.6遺跡	房塚?	古代?
32	千光寺遺跡	寺院	中世	66	西谷No.4遺跡	房塚?	古代?
33	岸谷遺跡	散布地	旧・滿・古	67	西谷遺跡	墓葬	平安
34	池原遺跡	散布地・集落	旧・滿・古	68	西谷No.10遺跡	房塚?	古代?

第1表 周辺の遺跡一覧



ていること、外側空堀を人為的に埋めていること、空堀内部に階段が確認されたことなど多くの成果が得られた。また平成10年度には、B郭東南部域において、K郭で人為的に埋められた空堀が検出されたこと、B郭南側空堀および馬洗池から厚い焦土の堆積が確認されたこと、複数回にわたる大規模な造成工事が実施されていること、大幅に縄張りの変更を実施していることなどの成果を得ることができた。平成11年度については、城跡北部の池ノ平等屋敷で発掘調査を実施し、城跡中心部と同時に造成されたこと、小規模な建造物の存在を確認したことなどが成果としてあげられる。測量調査は、平成9年度がB郭を含む城跡中心部南域、平成10年度はA・C郭を含む城跡中心部北域および城下町土塁跡周辺、平成11年度は池ノ平等屋敷・七ツ尾山周辺域およびD郭周辺である。

平成12年度は、E・F郭周辺を対象として発掘調査を実施し、測量調査は長尾山・中尾骨周辺について実施した。発掘調査では、E・F郭周辺が最も増山城跡の大手口である可能性が高いと考えられ、関連する遺構や造成時期を確認することを目的として調査対象地とした。平成13年度は、C郭・D郭周辺を対象として発掘調査を実施し、測量調査は御所山・城跡西城周辺について実施した。発掘調査では、C郭-D郭間の空堀状況や連絡路の状況を確認することを目的として調査対象地とした。また、平成12年度の追加調査として、F郭下における堀切の連続性の有無を確認するために調査区を設定し、調査を実施した。

III 調査の経過と方法

1. 調査の経過

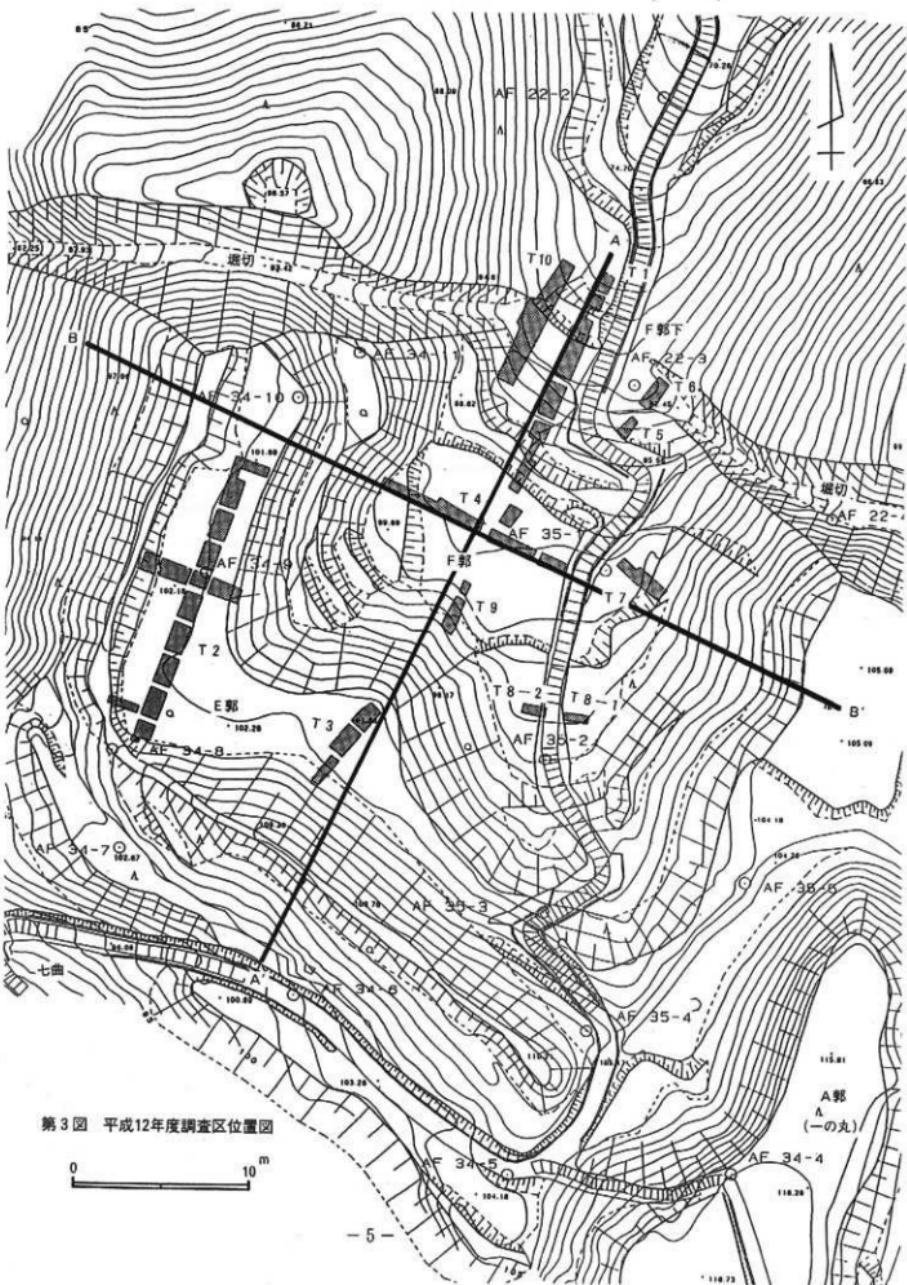
発掘の事前に、発掘調査対象区およびその周辺の下草刈りを実施し、また堆積物の除去作業も行い、地形の変化が分かり易いように努めた。その後、幅約1～2mでトレントを設定し、平成12年度は9ヶ所、平成13年度は2ヶ所の掘削を行った。トレントについては、平坦面や堀に直交するとともに、断面図にて各所のエレベーションを確認できるように設定した。掘り下げは地表面までを基準とし、バックホウおよび人力にて実施した。また、立木の伐採は基本的に行わないこととし、トレント内においても立木を残している部分がある。

調査にあたり、平成9年度より増山城跡総合調査委員会を組織し、調査方法・調査地点などについて検討する機関としている。調査前には調査対象区の選定と具体的な調査方法を検討し、調査期間中においては現地にて遺構・遺物の検出状況を確認しつつその時点での発掘の成果や今後の調査について検討を行った。調査後には、調査の結果報告および今後の調査について確認した。

調査終了後の埋め戻しはバックホウおよび人力にて行った。斜面では崩落を防ぐため、土のう袋を積み上げることによって斜面を復元している。

2. 座標軸の設定

座標軸は増山城跡から龜山城、孫次山砦などを視野に入れ、国土地理院設定第Ⅶ座標系のうち $X=72.5$ km、 $Y=-11.5$ kmの点を原点として設定した。南北軸をX軸とし、 $X=0$ から北方向へX座標の数値が増える。同様に東西軸はY軸とし、 $Y=0$ から東方向へ進むにつれて、Y座標の数値が増える。1グリッドの区画は 10×10 mとし、平成12年度調査区の範囲は $X=515\sim 550$ 、 $Y=185\sim 225$ 、平成13年度調査区の範



第3図 平成12年度調査区位置図

図はX=455~480、Y=290~315である。また発掘調査用としては別に小グリッドを設定した。1グリッドの区画は2×2mである。平成12年度の測量調査対象面積は91,000m²で、発掘面積は279m²である。平成13年度の測量調査対象面積は82,000m²で、発掘調査面積は44m²である。

IV 調査の概要

1. 平成12年度調査区

(1)概況

調査対象地区は増山城跡の北西城にあたり、和田川ダムから連絡する遊歩道を約200m登った位置にある。城跡から北方へは2つの尾根が伸びており、その谷筋に沿って遊歩道が続いている。西側尾根上にはE郭、尾根に挟まれた谷部にはF郭が存在する。

E郭は細い幅のL字状を呈する平坦面で、面積は約750m²、標高は101~102mを測る。郭の北部には東西方向に造られた堀切が存在し、西辺・南辺には土壘が配置されている。

F郭は2つの尾根に挟まれた平坦面で、面積は約600m²、標高は88~93mを測る。郭内は高低差60cmの2段の平坦面で、北辺幅30m、南辺幅10mの台形に近い形を呈する。この北斜面には平坦面があり、さらに約6.5m下には東西の堀切を結ぶ平坦面がある。

北方の和田川ダムからの遊歩道はF郭北斜面でクランクしてF郭へ続いており、さらにF郭からA郭下へ至るまで再度クランクしている。昭和62年から平成3年までの間につくられたもので、施工者によれば従来の道をほぼ踏襲して設置したことである。

一帯の現況は、主に植林による杉林である。平坦面については、畑や水田として戦後まで利用されていたという。

(2)遺構(第4~6図)

1) E郭(T2・3)

郭平坦面において、郭造成の状況ならびに建造物の検出をねらいトレンチを設定した。

トレンチの断面観察から、郭平坦面は尾根を削平し2、一部を埋めて造り出していることが明らかになった。盛土は2トレンチ中心付近において最も厚く、これよりF郭からの谷の入り込みが考えられる。尾根を削り平坦面を造る時には、すべて平らにするのではなく、西側斜面の一部を残して土壘とし、郭の南部では尾根を残して壠として利用している。また、土壘の裾部には礫層を掘り込んだ溝が存在し、西土壘、南土壘の裾部にいずれも確認される。溝の幅は40cm、深さは20~70cmを測る。溝底部の標高は、南土壘では100.93m、西土壘では101.3~101.8mを測ることから、2本の溝の存在が考えられる。

L字状の郭の屈曲部から15mほど東には、半円形に北方へ張り出した地形が存在する。3トレンチの断面観察からは、盛土によって張り出しを造っておらず、元来の地形を利用していることを確認した。また、この場所では、土師器確認面と越前確認面の2時期の遺物包含層を確認している。越前確認面直下から径30~35cm、深さ30~40cmのピットが4箇所検出された。

E郭北部では、地表面下約2mにおいて平坦面を確認した。平坦面造成後、その上に盛土し、再度平坦面を造っている。この位置は、E郭において平坦な部分が終了し、斜面となる境にあたる。斜面は元々の

尾根を残しているように見受けられる。

2) ドレンチ中心付近では、底部に炭化物が堆積するピットを確認した。炭化物は放射性炭素年代測定を実施し、 834 ± 62 年という結果がでている。

遺物は、中世土師器、瀬戸美濃、越前、青磁、古銭、砥石で、時期は16世紀後半～17世紀前半。

2) F郭(T1・4・7～9)

郭平坦面において、郭造成の状況ならびに建造物の検出をねらいドレンチを設定した。

郭は、北側が谷筋を開けており、東・南・西の三方が急な斜面で囲まれている。F郭は大きく平坦面の2段構成で420m²の平坦面と南側の約60cm高い位置180m²の平坦面がある。断面観察から、斜面は泥岩層を形成しており、平坦面は盛土により造成していることを確認した。遺物包含層の状況から、F郭では少なくとも2回の使用面が考えられる。標高87m付近では多量に遺物が出土しており、土師器などから16世紀中頃～後半頃とみられる。さらに1m程度の盛土をして2度めの使用面を造り出していると考えられる。上層の使用面については遺物が少量のため時期の特定は困難である。

T4西側斜面裾には、幅50cm、深さ15cmの溝状の落ち込みを確認している。

また、F郭周囲の斜面は泥岩層の整形により、泥岩層の露出した状況が考えられる。

遺物は、珠洲、土師器、瀬戸美濃、漆塗り椀、箸、折敷などが出土している。時期は16世紀後半～17世紀前半のものが中心で、西側斜面裾付近に遺物が多く確認されている。

3) F郭下(T1・5・6・10)

F郭下の状況確認および堀切との連絡を明らかにすることを目的としてドレンチを設定した。

東西堀切の連絡については、平成12年度の調査(T1)で地表面下2.5mまで掘り下げたが、地山層まで至ることができず課題を残した。そのため、平成13年度においてドレンチを西側堀切裾に設定し(T10)、再調査をおこなった。その成果として、泥岩層を掘り込んだ幅3m深さ2.2mの空堀を確認することができた。空堀内にはシルトが堆積しており、空堀底部付近(標高77.16m)において土師器1点を確認している。空堀の南側には平坦面があり、調査区内では泥岩層を整形して平坦面を造っている状況がみられた。また、下駄、漆塗り椀が地表面下約2mのシルト層内で出土しており、同時に倒木根を確認した。

また、F郭下平坦面の東西堀切裾部からF郭平坦面までは7m余りと、かなりの比高差がある。

遺物は、中世土師器、越前、瀬戸美濃、漆塗り椀、下駄が出土している。

(3) 遺物(第7～9図)

遺物は総数162点出土し、種類としては珠洲、中世土師器、瀬戸美濃、越前、青磁、漆塗り椀、下駄、箸、折敷、砥石、古銭などが確認された(第7～8図)。遺物の総数は162点であり、うちの58%を中世土師器が占める。

1) 土器類

中世土師器(1~45)

中世土師器は最も出土量が多く、全体量の58%を占める。口縁端部の形態から7類に分類した。口縁部片は61点を数える。そのうち43点を口径9~10cm、11~12cm、13~15cmで大別し、それぞれ13.9%、46.6%、39.5%の割合で確認した。

1類は端部が鋭角的なもの(1~2)

1・2は直線的に体部が外反する。

2類は端部にやや丸みを帯びるもの(3~4)

3は体部に厚みをもつ。4は摩滅が著しい。

3類は端部が三角形状のもの(5~10·15)

5~8は内面にナデがみられる。6は内面にナデがみられ、口縁部がやや厚みを増す。9·10·15は口縁外面をナデ調整し面を作る。10では内面もナデ調整。7は口縁部に厚みをもつ。

4類は端部が外反するもの(11~12)

11は口縁端部にススが付着。内外面ともに摩滅が著しい。12は口縁内面のナデで外反を強調する。

5類は端部が内湾するもの(13~14)

13は内外面ともにナデがみられる薄手のもの。14は口縁端部にわずかなスス付着。

6類は端部が立ち上がるもの(16~39)

16~22は胴部からほぼ直線的に外傾し、端部が立ち上がる。23·24は口縁がわずかに外反し端部が立ち上がる。25~27は口縁がわずかに内傾し端部が立ち上がる。28~36は口縁部が肥厚し、端部が立ち上がる。37~39は口縁が外反し端部が立ち上がる。38はほぼ完形品で、37·38ともに口縁にわずかにススが付着する。

24·29は黒色土器。

7類は内湾するもの(40~42)

40~42はいずれも一旦外反し、口縁部が内湾する。41は器厚が厚い。

その他の中世土師器(43~45)

43は体部の薄いもの。43·45は底部。45は黒色土器。

中世土師器の年代について位置付けると、4のように端部の丸みを帯びるものは16世紀前半から中頃で弓庄城C地区S D1002出土土器〔上市町教育委員会1985〕に類例がある。33·36のように体部が肥厚し口縁端部のつまみあげが確認されるものは、魚津市丸塚〔魚津市教育委員会1986〕などに類例があり16世紀中頃から後半。23は福岡町木舟城のものと類似し、天正年間(1573~1591)のものと判断される。

須恵器(46) 内面に波状痕、外面に格子状痕がみられる。

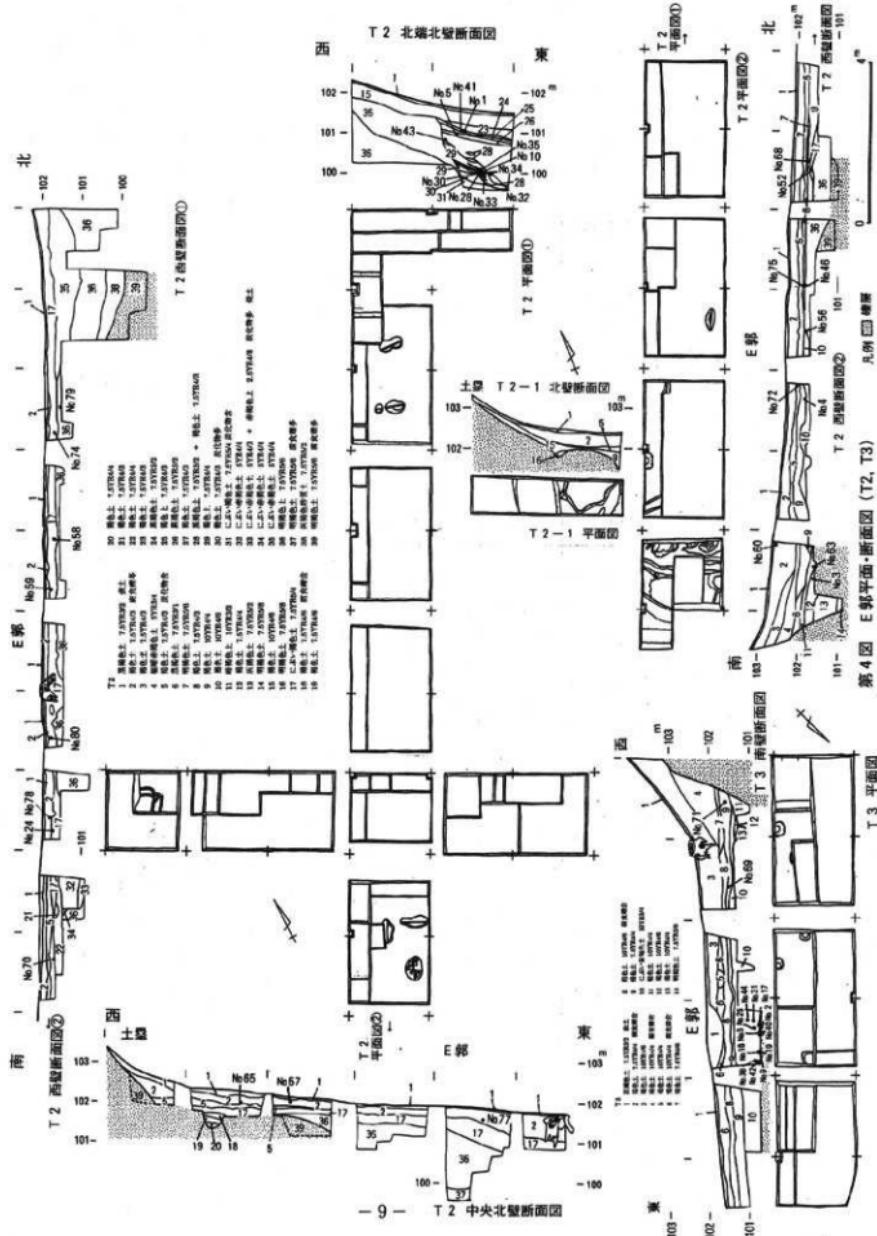
珠洲(47~49) いずれ破片で、外面にタタキ痕がみられる。

青磁(50) 口径10cmの小皿。

瀬戸美濃(51~60)

51は口径10cm、器高2.1cmの小皿。52·55は碗か。53·54は天目茶碗。53は茶褐色で口径11cm、54は濃緑色で口径12cm。56は壺。57·59は香炉で、口縁下、底部付近に2条の沈線が施される。

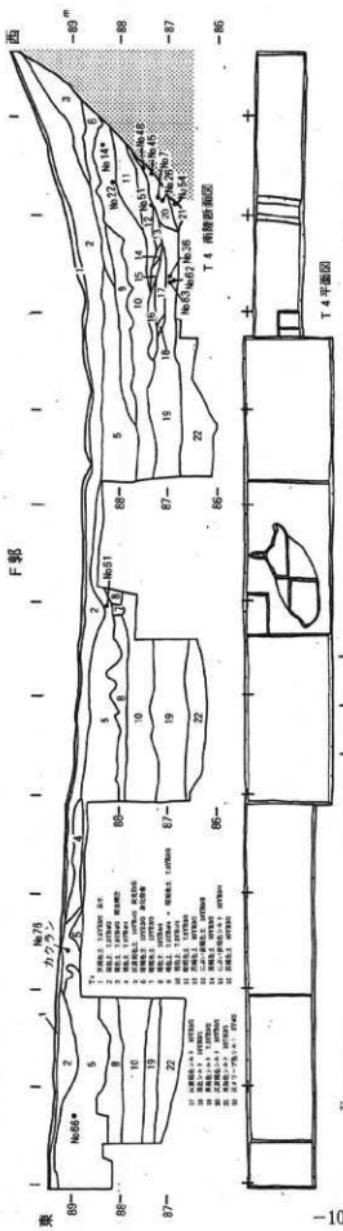
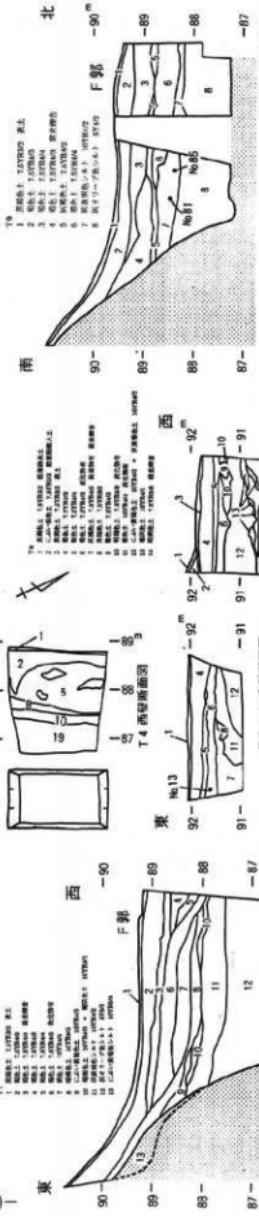
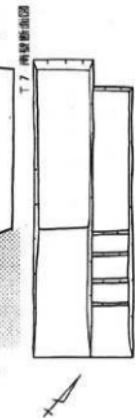
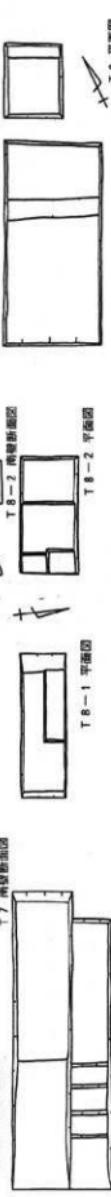
越中瀬戸(61~66) 61~63·66は擂鉢。64は碗。65は皿か。

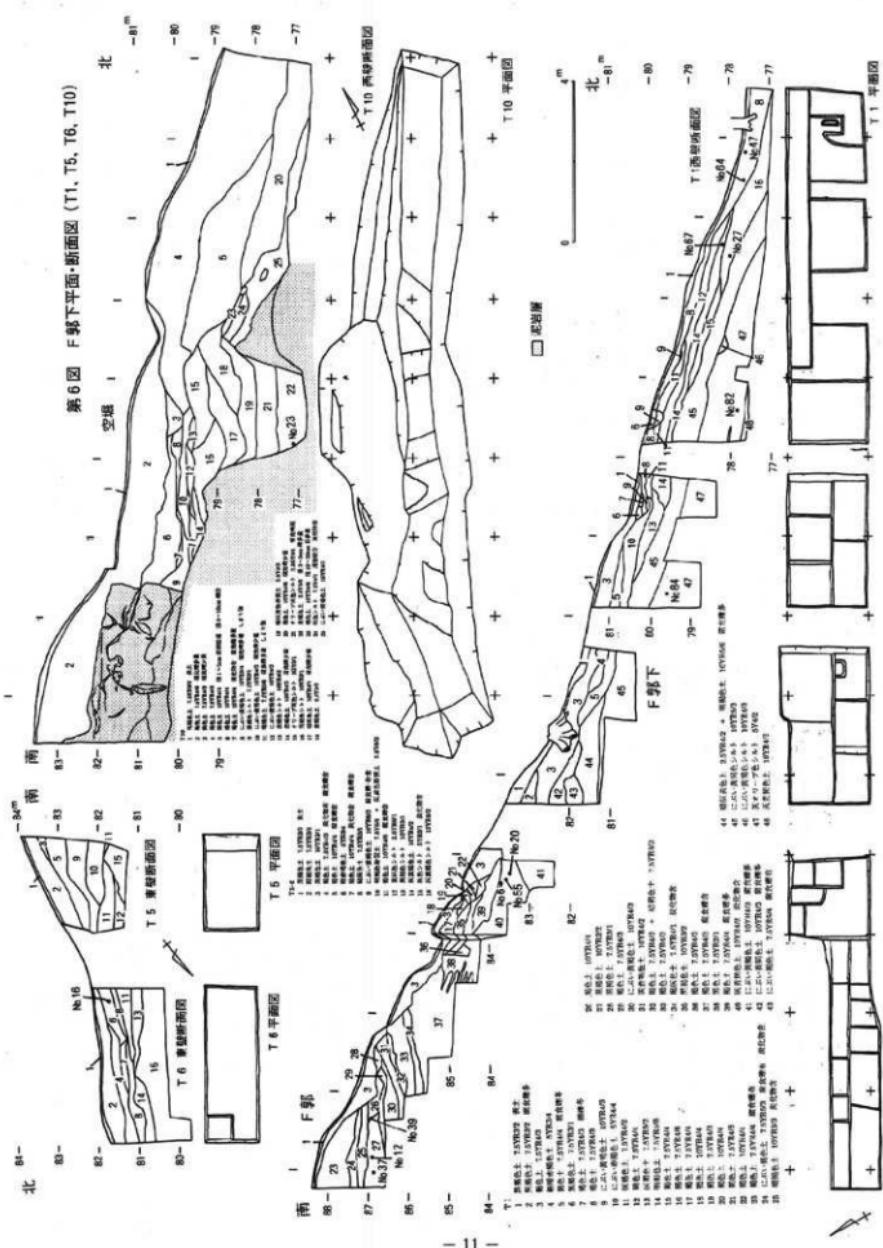


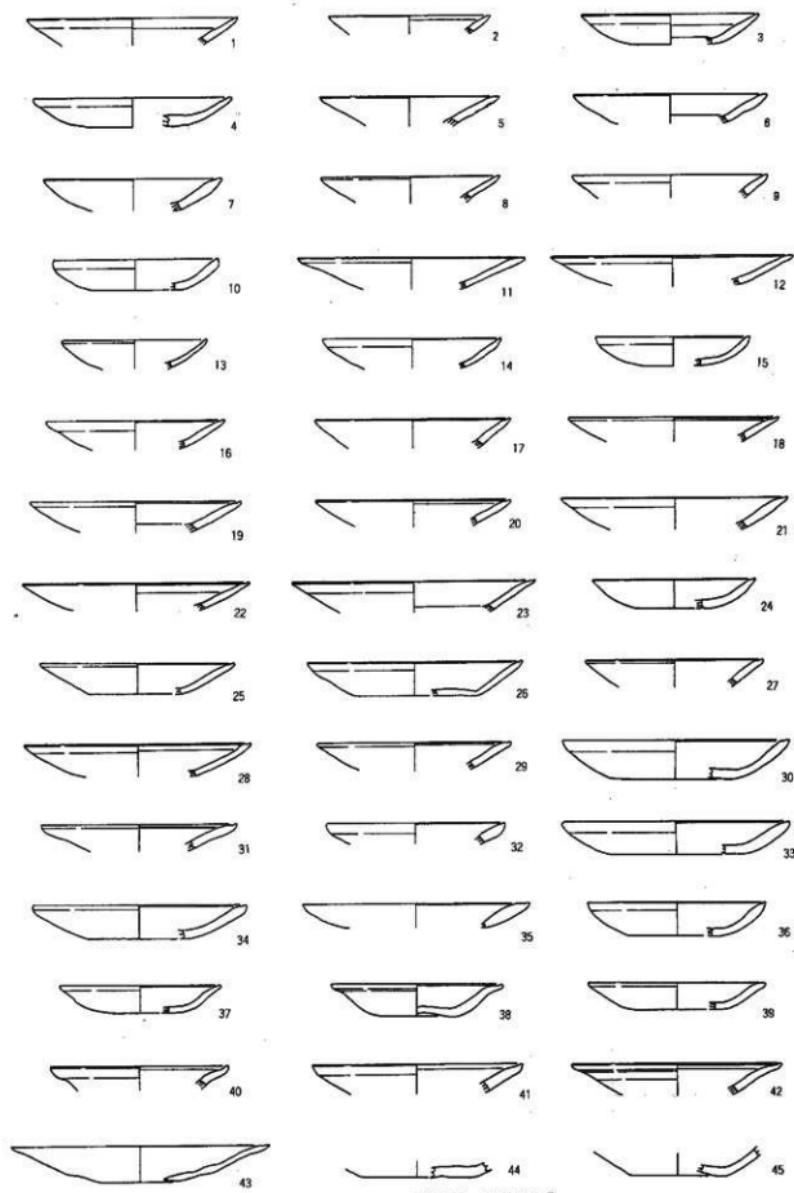
4 m
0

泥岩層

第5圖 F 部平面-斷面圖 (T4, T7~9)



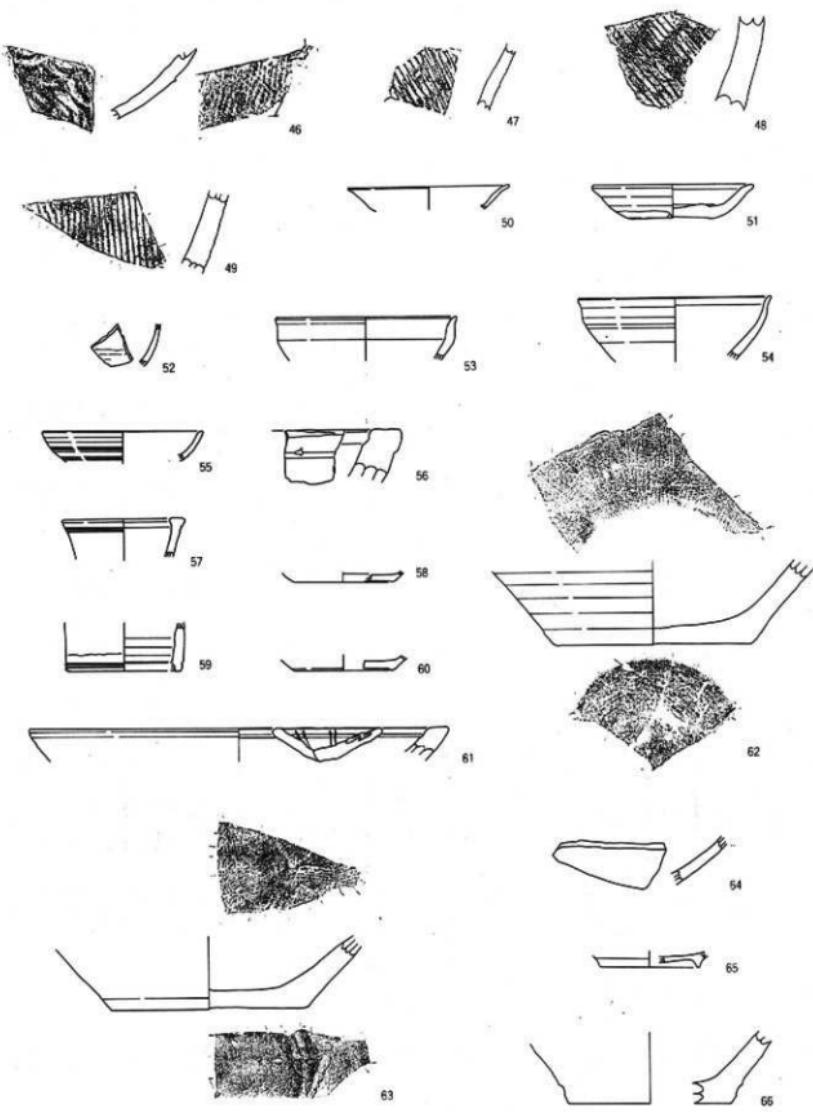




1~45 中世土師器

第7図 出土遺物①

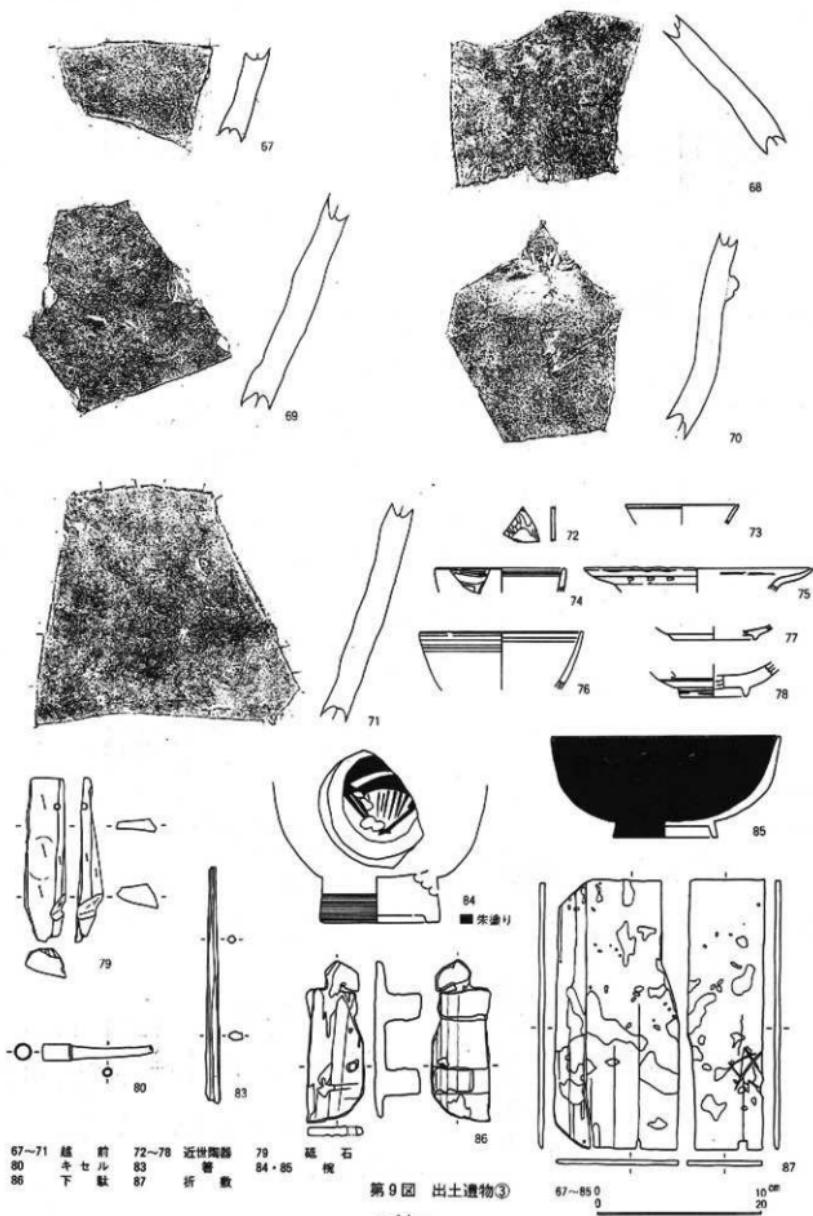
0 10 cm

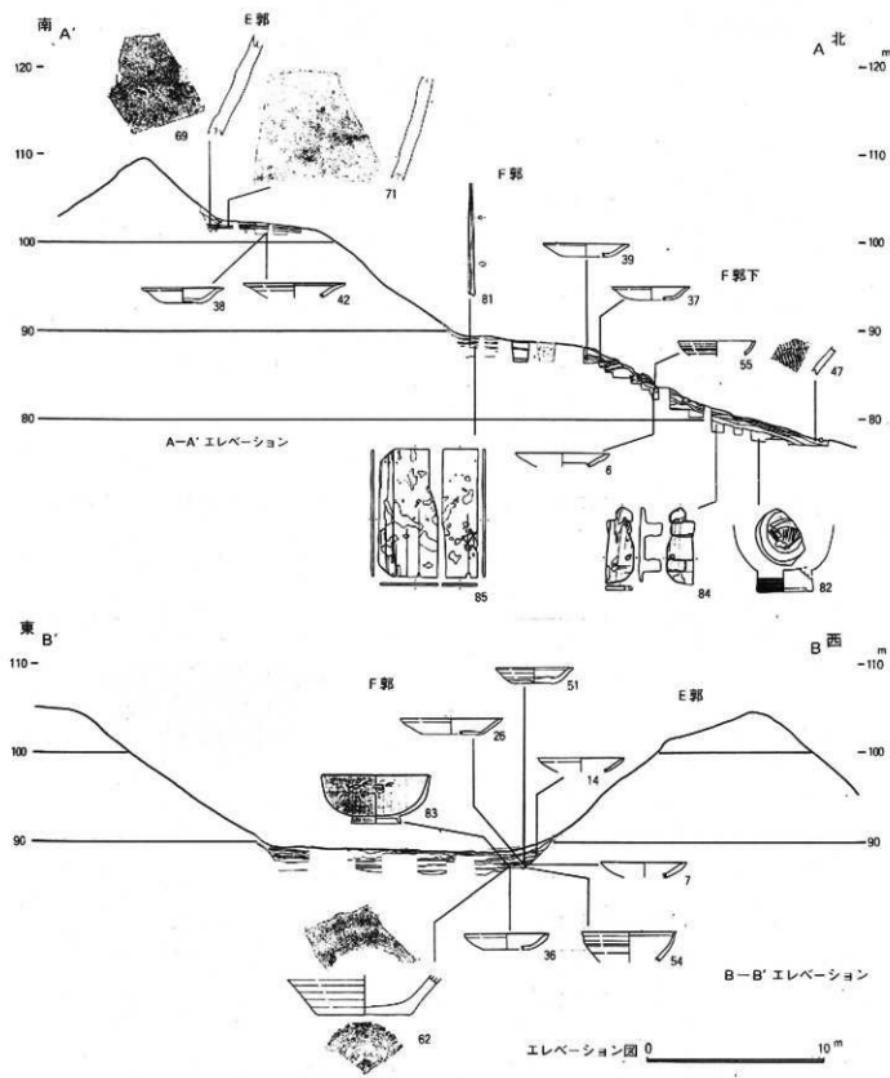


46 須 惠 器 47~49 珠 洲 50 青 磁
51~62 濑 戸 美 濃 63~66 越 中 濑 戸

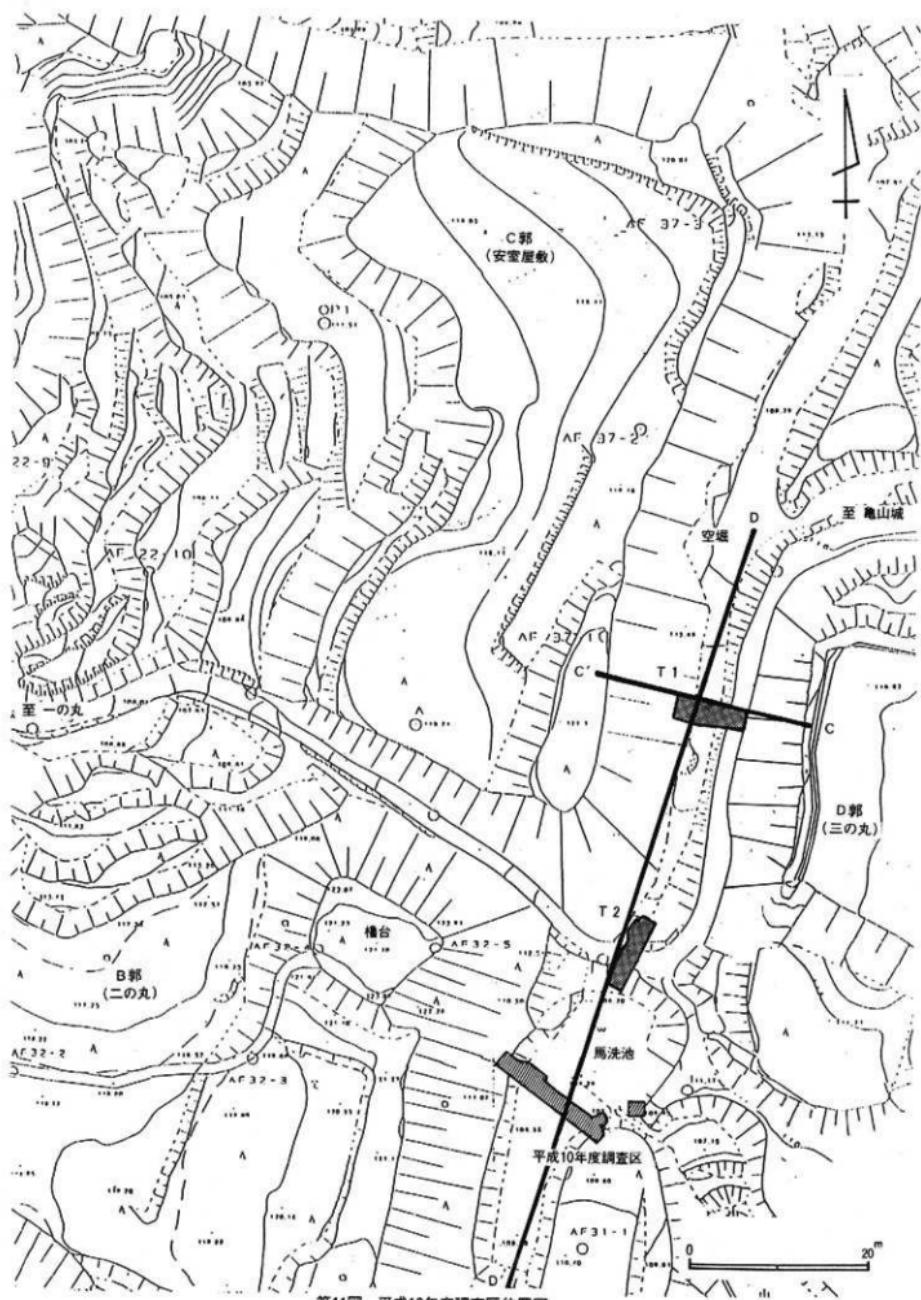
第8図 出土遺物②

0 10 cm

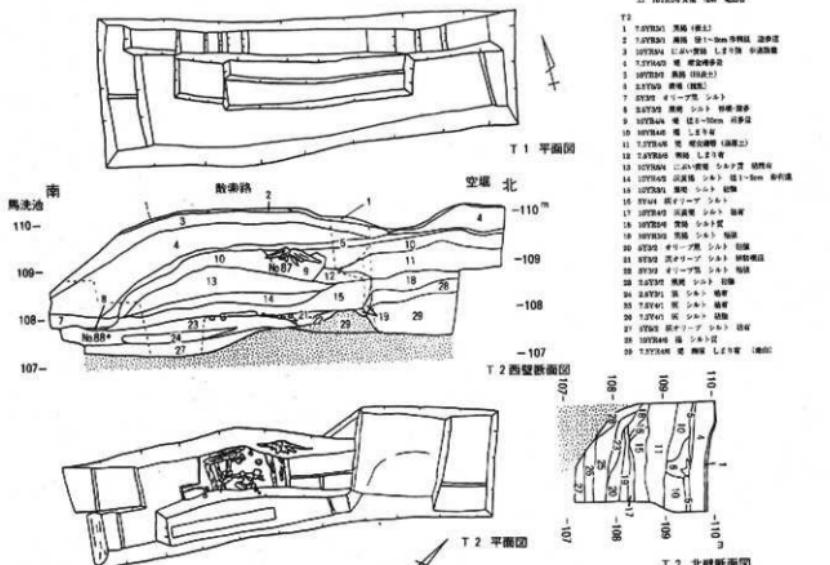
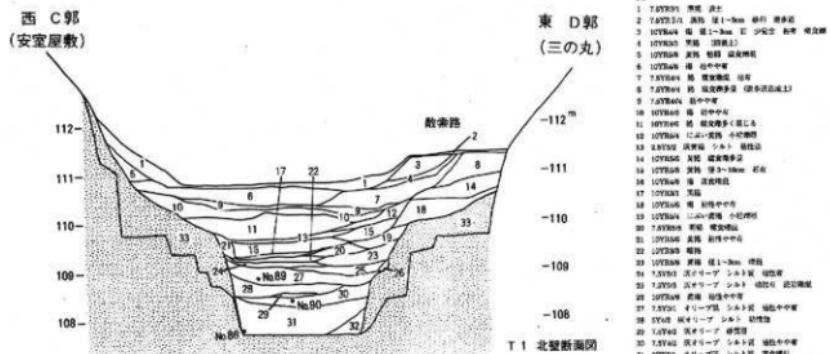




第10図 E・F郭エレベーション図



第11図 平成13年度調査区位置図



第12図 調査区平面・断面図 (T1, T2) - 17 -

越前(67~71) いずれも変片。器厚は1.5cm程度。

近世陶磁器(72~78) 72は湯飲み茶碗か。73・74・76は碗。75・77・78は皿。

2)木製品

箸(83) 長さ14.1cm、最大径8mm。1本のみ確認。

漆塗り杓(84・85) 84はF郭下より出土し、黒漆地に朱塗りで肩の模様が描かれている。底部は厚く2.5cmを測る。85はF郭より出土。朱漆地に黒漆により肩状の模様が描かれている。口径14cm、器高6.2cm、体部は薄く5mm程度。

下駄(86) 現存長24.4cm、現存幅13cmで、鼻緒のための穿孔がある。

折敷(87) 長さは33.2cm、厚さは4mmを測る。破損が著しい。

3)その他

79は砥石。現存長10cmを測り、右上部には径4mmの穿孔がある。表裏面ともよく使用されている。80はキセルの吸い口。身の部分の径は1cm、口部は5mmを測る。81・82は古錢で81が照寧元寶、82は皇宋通寶でいずれも宋錢である。

2. 平成13年度調査区

(1)概況

B郭の北東域にあたるC郭・D郭の両郭は、増山城跡の中心部をなす郭であり、いずれも深く広い空堀が周囲に配置されて防御を固めている。C郭とD郭の間の空堀はの中でも大きく、増山城跡の代表的な遺構の一つとなっている。空堀は増山城跡中心部の東・南方面を守る内・外二重空堀の内側の空堀である。長さは、南北方向にC郭の北東部から馬洗池を通りK郭までの約200m余り、方向を南西方向へ変えて無常方面へさらに100m程度の計約300mを測る。空堀地表面からC郭やD郭の平坦面までは約8~10m、空堀の肩幅は約20mを測る。地表面上の堀底部幅は約7mであり、D郭西側にはB郭方面から亀山城跡方面へつながる幅2mの歩道が設けられている。

歩道はB郭北側裾をほぼ東西に通り、馬洗池の北辺を沿ってD郭に至り、D郭裾で方向を変えて北へ続く。歩道と馬洗池地表面では1.8m、空堀地表面では40cmの比高差があり、土橋状に高まりをみせている。

周辺は植林による杉林であり、特にD郭はマスヤマスギの親杉があるといわれている。平坦面は戦後しばらくまで、C郭が畑、D郭は茶畠として利用されていたが、現在は杉林となっている。

(2)遺構(第12図)

1)空堀(T1)

この調査区は、空堀の構造・造成時期の確認を目的とし設定している。調査では、現地表面下約3.1mにおいて堀底を確認した。標高は107.7mで、ほぼ平坦な堀底幅は2.3mを測る。空堀は疊層を掘り込んだもの。空堀断面形状は、底部からほぼ直線的に立ち上がるが、標高110m付近では傾斜変換点がみられ、一旦

緩やかな傾斜で広がって郭平坦面へ向かって徐々に立ち上がりを急にする。D郭側空堀斜面の傾斜変換点付近では、幅70cm程度のやや平坦な面があり、通路としての利用が考えられる。堀底は標高107.81mで、底部付近からは16世紀後半～末の土師器皿が1点出土しており、天正年間(1573-1591)の頃と推測される。

2)馬洗池北部遊歩道(T2)

この調査区では、B郭方面からD郭への連絡通路の状況を確認することを目的とした。当初は土橋による連絡方法を推定していたが、土層からその状況は確認されなかった。しかし、地表面下約2.2mの標高108m付近において、川原石と木材により通路を造っていることを確認した。通路の最大幅は1.8mで、現在の遊歩道と方向を同じくしている。通路はまず東西方向に平行となるような木材をおき通路幅を決め、その中に川原石を詰めて堅固なものとし、その上に通路方向と直交するように木材をおいて踏み材としている。

また、空堀と馬洗池の間には地山を削り残した高まりがあり、連続していないことがわかった。高まりは馬洗池底部から1m程度高く、最頂部はやや平坦で幅50cmを測る。高まりにより、池と堀との明確な区切りをつけている。今年度の調査で馬洗池底部標高は107.23mを測った。

調査区西壁の後世の集石と考えられる層からは、越前窯片を1点確認している。また、馬洗池からは漆塗り椀が1点出土しており、16世紀末のものと考えられる。

(3)遺物(第14図)

土師器(88)

口径17cm、器高2.1cm、にぶい黄橙色を呈し、口縁端部はわずかにつまむ。16世紀後半から末頃。T1空堀底部付近から出土。

越前(89)

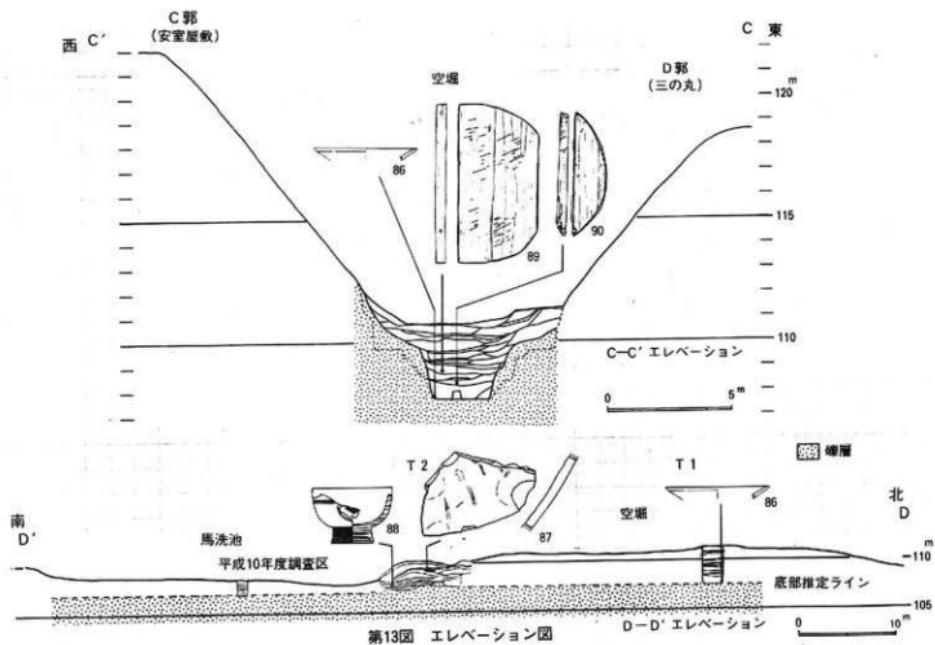
窯窓部片。内面には積み上げ時と思われる指痕状の痕跡が残る。T2西壁集石層より出土。

漆塗り椀(90)

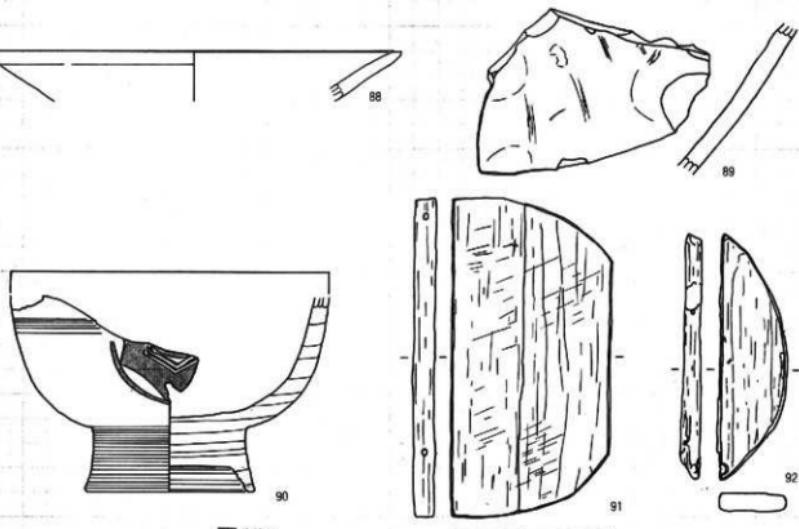
T2の馬洗池より出土。大きさは底径7cm、高台2.7cmで、口縁部の欠損のため口径は推定約13cm。体部厚は8mmで口縁部への立ち上がりが強い。底部厚は2.1cmで、脚は1cmの高さがありわずかに裾が広がる。内外面に黒漆を塗り、外面上には朱漆により模様を描く。模様は、体部上位に横線が2~3本、体部中央附近には全体ではないが「丸に亀甲」状の図柄が描かれる。

桶底(91-92)

桶底は2点で、いずれもT1出土。91は最大長26cm、最大幅23.2cm、厚さ1.8cmを測り、残存率は60%。断面に5mm×4mmと6mm×5mmのいずれも梢円形である2ヶ所のはぞ穴が確認される。92は最大長20.2cm、最大幅5.5cm、厚さ1.5cmを測り、残存率は25%である。断面に4mm×3mmの梢円形状と4mm×2mmの半円形状である計2ヶ所のはぞ穴がある。



第13図 エレベーション図



■未塗り
88 中世土器
89 越前
90 檻
91・92 檻底

第14図 出土遺物④

V まとめ

1. 平成12年度調査区

E・F郭周辺は、北方をにらむ要地であり、その地形から増山城内への進入路が存在すると考えられる場所の一つである。

さて、E・F郭周辺は増山城の大手ではないかと推定し発掘調査を実施した。調査成果からは、E・F郭平坦面では2回程度の大規模造成が実施されていることを確認した。E郭では尾根を削平し、凹んでいる部分には盛土をして平坦面を造成しているとともに、土墨壠には排水用と思われる疊層を掘り込んだ溝が配置されている。E郭は16世紀末～17世紀初頭の頃の遺物が多い。F郭では少なくとも2期にわたる使用が考えられる。下層の遺物包含層は多量に遺物が出土しており、土師器などから16世紀中頃～後半頃とみられる。盛土により2度めの使用面を造り出しているが、遺物が少量のため時期の特定は難しい。また、F郭周囲の斜面は泥岩層の整形によるもので、雨水などにより滑りやすくなることから防衛には有効と思われ、さらにF郭下の西側斜面も同様に泥岩層が露出していたとみられる。F郭下においては、西側掘切と連続する空堀を確認し、東西の掘切が空堀によってつながっていた可能性がある。谷を堀切・空堀で遮断することにより、防衛線をつくりだしている。空堀内部はシルトの堆積がみられることから、一定時期に水が溜まっていたことが推測できる。

F郭下から遊歩道を登っていくと、比高差約7mのF郭北斜面が行く手を阻み、クランク状に屈曲して城内へと通じている。遊歩道は昭和62年から平成3年までの間につくられたものであるが、施工者によれば従来の道をほぼ踏襲して設置したということである。天保15年(1587)の「砺波郡増山村御林之内新聞被印付候右地元御引渡ニ付、絵図」や嘉永頃作図と考えられる「砺波郡増山村古城跡之図」には、現在のようなルートが記載されており、古くから利用されていたルートの一つであることは間違いない。

調査区周辺については、発掘成果に加えて、北方を意識した防衛線造りや谷筋を監視するような平坦面の配置などから、16世紀末から17世紀初頭には北側から城内へといたる進入路が存在するが、大手(正面入り口)にあたるかどうかについては今後検討していくたい。

2. 平成13年度調査区

本年度調査区は、C郭とD郭とに挟まれた増山城跡の代表的な空堀である。調査の結果、大規模な造成工事により空堀が造られていることが確認された。空堀の底からC郭平坦面までは12m、D郭平坦面までは10mを測り、大変な比高差がある。空堀断面形状をみると底部からほぼ直線的に立ち上がるが、標高110m付近では傾斜変換点がみられ、そこから郭の上部へ向かって徐々に立ち上がりを急にする。

D郭斜面中における標高110m付近の緩斜面は、ほぼ平坦になり、幅は約70cmを測る。このことからD郭に沿って犬走り状の通路が存在したことが考えられ、現在の遊歩道のようにD郭堀を通って御所山方面へ続いているとみられる。

空堀底部付近から出土の土師器は天正年間(1573～1591)頃のものと考えられ、空堀の造成の時期が判断される。松雲公採集遺編類纂にある天正13年(1585)前田利家書状には、佐々成政が増山城の普請をおこな

っているとの記述があり、上記の造成時期の裏付けとなる可能性がある。

C郭とD郭間の空堀は、C郭北部からK郭に至り方向を南西方向へ変えて無常方面へ向かっている。K郭周辺は平成10年度に調査を実施したが、その際に空堀の付け替えと郭（K郭）の造成という大規模な繩張り変更の状況を確認した。この時には、B郭南空堀とのつながりから当初の造成が16世紀中頃～後半と考え、付け替えの二度目の造成については決め手となる遺物などが確認されなかつたが、16世紀後半～末頃と推定していた。今年度の調査結果から、16世紀第4四半期には空堀の造成が行われていることが確認されたので、K郭周辺における二度の大規模造成についても同時期のものと考えられるのではないだろうか。すると、その二度の大規模造成を実施したのは、佐々成政ということになるだろう。

B郭方面からD郭へ至る馬洗池北部の遊歩道は土橋状になっており、城跡使用時にも土橋が存在したことが推測された。しかし、期待した規模の土橋は確認されず、川原石と木材により造られた通路と、その下位層に地山を削り残した高まりが確認された。通路は現在の遊歩道と方向を同じくしているが、層序から空堀造成時期よりも少し後のもの（16世紀末以降か）と考えられる。高まりは馬洗池底部から高低差1m程度で、池と堀との明確な区切りをついている。地山の削り残しということからも、16世紀後半～末の空堀造成時の同一時期に造ったとみられる。高まりの頂部は平坦で幅50cmを測り、通路としての利用は考えられる。

《引用・参考文献》

- 魚津市教育委員会1986『富山県魚津市本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
上市町教育委員会1984『弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会1985『弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』
河合久則1965『増山城をめぐって』『砺波市史』砺波市史編纂委員会編
砺波市1990『砺波市史資料編1考古、古代・中世』
砺波市教育委員会1978『富山県砺波市梅檀野遺跡群予備調査概要』
砺波市教育委員会1998『増山城跡I』
砺波市教育委員会1999『増山城跡II』
砺波市教育委員会・砺波郷土資料館1991『増山城跡調査報告書』
氷見市教育委員会1993『県指定史跡阿尾城跡』
北陸中世土器研究会編1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』



1

2



3



4



5



6



8

写真図版 1

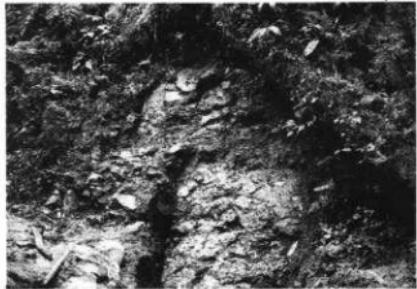
- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 F 郭より F 郭下をみる (H12) | 5 T 3断面 (H12) |
| 2 T 1 F 盛土状況 (H12) | 6 郭土壁掘溝検出状況 (H12) |
| 3 F 郭下空堀検出状況 (H13) | 7 T 2 焼土ピット (H12) |
| 4 E 郭発掘状況 (H12) | 8 増山城跡のナナフシ (H12) |



1



2



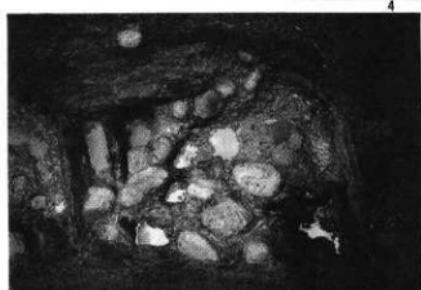
3



4



5



6



7



8

写真図版 2

1 F 郭発掘状況 (H12)

2 T 4 断面 (H12)

3 F 郭斜面 (H12)

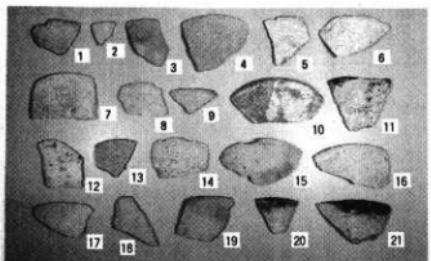
4 T 1 断面 (H13)

5 T 2 発掘状況 (H13)

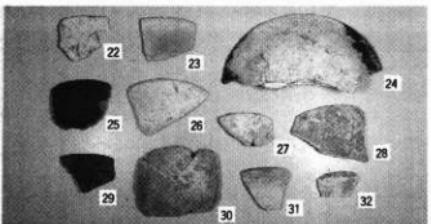
6 通路検出状況 (H13)

7 通路撤去状況 (H13)

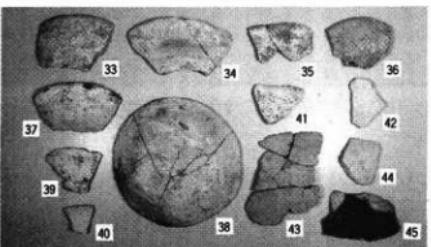
8 朱塗り陶出土状況 (H12)



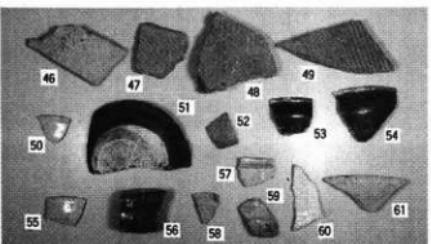
1



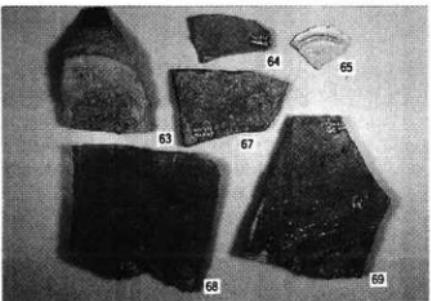
2



3



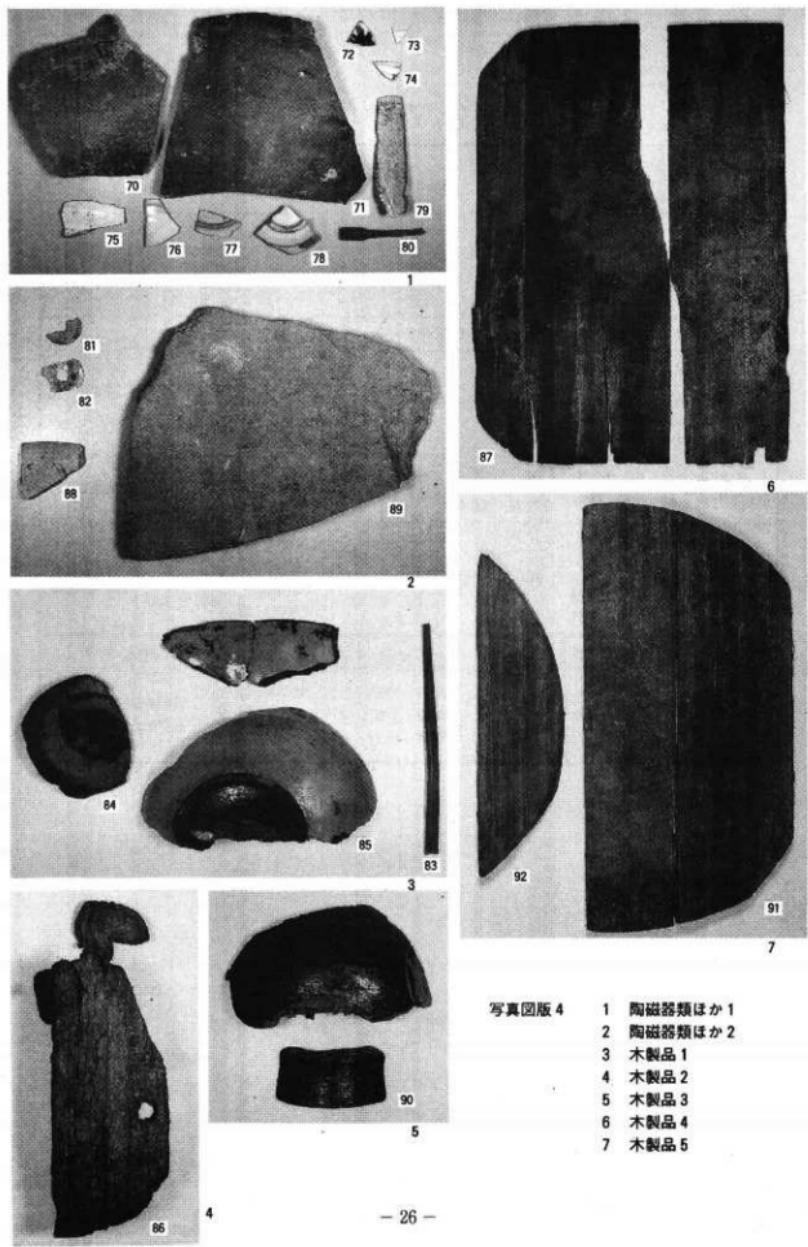
4



5

写真図版 3

- 1 中世土器 1
- 2 中世土器 2
- 3 中世土器 3
- 4 陶磁器類 1
- 5 陶磁器類 2



写真図版 4
 1 陶磁器類ほか 1
 2 陶磁器類ほか 2
 3 木製品 1
 4 木製品 2
 5 木製品 3
 6 木製品 4
 7 木製品 5

報告書抄録

ふりがな ますやまじょうせき								
書名	増山城跡							
シリーズ名	(4)、(5)							
編集者名	利波匡裕							
編集機関	砺波市教育委員会							
所在地	〒932-1398 富山県砺波市栄町7-3 TEL (0763) 33-1111							
発行機関	砺波市教育委員会							
所在地	〒932-1398 富山県砺波市栄町7-3 TEL (0763) 33-1111							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°	調査期間	発掘面積 2000年279m ²	埋蔵文化財 緊急調査平業
増山城跡	富山県砺波市 増山字一の丸 3324 外	208	001	36° 38' 55"	137° 2' 41"	20000717～ 20011201 20010801～ 20011126	2001年 44m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
増山城跡	山城	中世	空堀 通路 土塁 溝	珠洲、中世土器類、瀬戸美濃、 越前、青磁、漆塗り椀、下駄、箸、 折敷、砥石、古錢			堀切を結ぶとみられる空堀が確認された	

平成14年3月

増山城跡 IV・V

編集 研波市教育委員会

発行 研波市教育委員会

富山県砺波市栄町7-3

